



新約聖書と神の民

キリスト教の起源と神の問題1

N・T・ライト著 / 山口希生訳

ライトの主著、待望の邦訳、完結！

著者の壮大な構想「キリスト教の起源と神の問題」全6巻の第1巻。下巻では、上巻の方法論的基礎づけを踏まえ、原始教会のヤハウエ信仰の内実、キリスト教会の新たな信仰のストーリーと新約聖書の成立過程を鮮やかに解明。

既刊 新約聖書と神の民 上巻

◆ A5判・609頁・本体6400円

◆ A5判・上製・336頁・本体3700円

下巻

3月23日発売

N・T・ライト (Nicholas Thomas Wright) 1948年生まれ。オクスフォード大学で学び、ケンブリッジ、オクスフォード等で教鞭を執った後、現在はセントアンドリュース大学神学部教授。2010年に退任するまで国教会タラム主教も務めた。新約聖書研究、とりわけ「パウロへの新たな視点」と呼ばれる新潮流を精力的にリードしている。

訳者 山口希生 早大卒後金融界で働いた後ライトに師事、博士号取得。牧会と教育の働きのために研鑽中。

「ブルトマン以降、新約聖書の歴史と神学に関してこれほど革新的で包括的な研究を試み、いわんやそれを成し遂げた新約学者は、ライトの他にいない。」

リチャード・ヘイズ (デューク大学教授)

第IV部 紀元1世紀のキリスト教

第11章 ケリユグマ教会の探究

第12章 実践、シンボル、そして問い

第13章 原始キリスト教のストーリー (1)

第14章 原始キリスト教のストーリー (2)

第15章 原始キリスト教徒たち

第V部 結論

第16章 新約聖書と神の探求

カール・バルト著／天野有編訳

教会と国家Ⅱ

東西冷戦の時代 バルト・セレクション6

◆文庫判・並製・567頁・本体1800円



敗戦直後のドイツ人とのように向き合うべきかを語った「ドイツ人とわれわれ」をはじめ、「キリスト者共同体と市民共同体」、「国家秩序の転換の中にあるキリスト教会」など、戦後冷戦期の重要論考11編を精選し、新訳で贈る。特別解説「神に基づく政治」（B・クラッパート）収録。

ハンディな文庫判で読めるバルトの新選集。

全7巻・収録作品はすべて新訳。

「カール・バルト著作集」に収録された重要論考を中心に77編を精選、最新の校訂と研究に基づき、気鋭のバルト研究者・天野有氏の新訳と訳註で贈る。「聖書と説教」「神学と教会」「教会と国家」「福音と文化」の4テーマに分け、各テーマ内を編年順に配列。バルトの全体像を一望できる。



岩井健作著

聖書の風景

小磯良平の聖書挿絵

◆A5判・上製・160頁・本体2500円

日本を代表する洋画家小磯良平（1903～1988）が、日本聖書協会から委嘱され、口語訳聖書のために描き下ろした32枚の挿絵を収録。牧師として生前の小磯と親しく接していた著者が、画家の人生行路と重ねつつ、1枚1枚の挿絵を読み解いていく。はたして画家は聖書から何を読み取ったのか。

聖書から挿絵へ

挿絵から聖書へ

カール・バルト著／佐藤敏夫訳・解説

バルト自伝 改版復刊

バルトは雑誌の求めに応じて「この十年間に私の心はいかに変化したか」を3度寄稿した。かくして1928年から58年までの激動の30年間の生活と思想の軌跡を綴る自伝的文章が成った。佐藤敏夫氏の行き届いた解説と共に、バルト神学を理解する基本図書。◆新書判・予価1000円

栗林輝夫著／西原廉太・大宮有博編

アメリカ現代神学の航海図

フェミニスト神学、ウーマニスト神学、アジア系アメリカ神学、ポストモダン神学、ポストリベラル神学、修正神学、プロセス神学等々、複雑かつ活発な運動を絶やさないアメリカ現代神学の鮮やかな見取り図。〔栗林輝夫セレクション〕2。◆A5判・予価5500円

一色哲著

南島キリスト教史入門 (仮題)

琉球王国の最大版図とほぼ重なる「南島」のキリスト教は、日本のキリスト教に従属しない独自の深さと広がりを持つ。なぜ南島には多くの教会が建てられ、現在でも多くの人の信仰を集めているのか。その歴史を丹念な調査と重層的な視点から追究した労作。◆四六変判・予価2300円

●2月に出た本と雑誌

聖書翻訳者ブーバー



堀川敏寛著

その聖書翻訳を綿密に分析し、対話哲学との関連を明らかにした画期的な労作。◆A5判・本体4100円

キリスト教の再定義のために

荒井献一

荒井献一著

1958年の処女作から昨年までのさまざまな論文エッセイから55篇を精選。◆四六判・本体4500円

現代アメリカ神学思想 増補新版



宮平望著 平和・人権・環境の理念

6人の神学者のテキストを精密に分析し、変転激しいアメリカ神学の動向を活写。◆A5判・本体2800円

福音と世界

◆税込635円

3月号 特集 キリスト教と犠牲のシステム

寄稿者・小原克博、浅野淳博、松平功、小西哲郎、座談会

Ⅱ 高橋哲哉さんと語る／岡田圭、FUNI、高井ヘラー

由紀、徐京植、ブレイディみかこ、芦名定道、内田樹、

辻学、佐藤優、望月麻生

編集部から

●青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場を題材にした映画『へばの』で知られる木村文洋監督の新作『息衝く』を観てきました。とある新宗教団体で育った青年たちが、自らの掲げる理想と現実の間で揺れ動くさまを描いた作品です。『へばの』の続編となる本作には原子女子発電、家族なども設定に盛り込まれ、当初はやや欲張りすぎな気もしました。ですが、上映後に「原発や宗教など、自分が生まれたときからすでに与えられていたものに向き合うかを描きたかった」と監督あいさつがあり、納得がきました。生来の環境に否を言うという難題に体当たりする人びと。そうした普遍的なテーマをめざしたのが『息衝く』だったのでしょう。

●このテーマを扱った作品のはしりともいえるのが、出エジプト記です。虜囚先のエジプトでイスラエルの人びとは、肉の鍋を食べられる程度の生活を許されていました。それを捨ててエジプトを出るのかという選択に人びとは揺れますが、だからこそ神が海を割いて人びとを守り導くくだりはいっそう劇的です。ところで、こうした聖書の場面の挿絵を描いた画家・小磯良平について、その側で牧師として働いた著者が思い出を交えて評するのが新刊『聖書の風景』（岩井健著作）です。ここでは、小磯の信仰のみならず「画家の目」についてもたびたび触れられていますが、場面の内奥に潜むメッセージをカンパスへと再浮上させる画家の目は、すぐれた映画監督の目とも相通じるものなのかもしれません。（堀）

●昨11月に刊行した絵本『いのちの水』が好評です。シンブルな寓話のもつ深いメッセージが、美しい消しゴム版画の力と共に読者に伝わるのでしょうか。同書の刊行を記念し、原画展を開催します。5月9日（水）から27日（日）まで、教文館3階のギャラリーステラにて。期間中は、トークイベント、消しゴム版画ワークショップ、朗読ワークショップなど、参加型の楽しい催しを企画しています。また24枚の原画も販売する予定です。詳細が決まり次第、本誌やホームページ、SNS等で告知します。どうぞお見逃しなく。

福音と世界

2018年
4

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料（送料共）8460円

特集・復活物語をどう読むか

——聖書解釈の視座と方法

新約聖書解釈を楽しもう

——特集解題

廣石 望

動いた墓石

——歴史批評による解釈

挽地茂男

交錯する恥と名誉

——社会科学批評による解釈

李明生

「空の墓 物語における「神のこと」と「人間のこと」

——物語批評による解釈

三浦 望

舞い戻る死者 不正の告発

——クイア批評による解釈

安田真由子

「俺たちの戦いはこれからだぜえ！」

——教会で語られる説教

松本あずさ

【連載より】

◆野に咲く民衆の神学——別所梅之助を読む 1
森 宣雄

◆地のと低きところにホサナ 4……プレイデイみかこ

◆福音の地下水脈 6……FUNI

◆現代神学の冒険 19……芦名定道

◆聖書とわたし 25……角田光代

◆新約釈義 第一テモテ書 25……辻 学

◆レヴィナスの時間論 36……内田 樹

◆詩篇の思想と信仰 152……月本昭男